授業探訪「英語ディスカッション」

英語教育改革：英語ディスカッションクラスの2年間を振り返って

横本　勝也

はじめに

2009年度4月、1名のスーパーバイザー（SV）と8名の英語ディスカッション講師によって、約1,000名の一年次生を対象に、1クラス8名という少人数の英語ディスカッションクラスを行うパイロット年度を迎えた。SVを中心に、テキストを作成し、統一シラバスで授業を行い、SVと講師の間で定期的に意見交換を行い、それを基にテキストおよび授業内容を見直すという一年であった。2010年度には、新しくSVと講師が加わり、SV計4名、講師計42名で行う大規模な、全1年次生を対象とした必修の英語科目としての英語ディスカッションクラスが本格始動した。統一シラバスでの授業で、これほど大規模なものは大学レベルでは非常に珍しいが、あくまでも全学生に平等の学習機会を与えることを目標にしている。その英語ディスカッションセンターの方針は、当センタースタッフ、SV、講師その他関係者の尽力なしでは、2010年度の成功はもちろんのこと、実現することすら困難であった。他に例のない大規模な改革を行う上で、教育目標を達成することの重要さを理解し、実現そして成功へと惜しみなく後押しする当大学の英語教育に対する真摯な姿勢は、他大学からも注目され高評価を得ている。すでに、国内の大学および高等学校で英語を教える多くの教員の方々が、英語ディスカッションクラスの詳細を知りたがっているのは事実である。

社会のニーズと授業のねらい

何十年もの間、日本では、受験英語あるいは資格英語に関して疑問を抱く声が充満してきた。現在も、この問題に対する意見は賛否両論で、賛成派の言い分は、受験英語の知識は、英語を運用できるだけの十分な基礎力となることだ。対照的に、反対派は、受験英語は実際に英語を使えるところまで指導を行わないので、英語は知識として脳に残るが、言語として使えるようになる学習者はごく一部であることを主張する。受験、資格は、差がないと意味のない、人を区別するための手段であるため、全員ができるのでは非常に都合が悪い。しかし、言語は全員が使えないと都合が悪い。この矛盾を解決するには、受験を終えた大学での英語教育を変革するのが、現在の日本の社会では最も近道だとも言える。

資格先行型ではあったものの、日本企業の海外進出、あるいは外資系企業の日本進出が珍しくない現代では、英語で仕事ができることが大きな戦力となる。近年では、UNIQLOそして楽天が社内公用語を英語としたことが話題になり、英語コミュニケーション能力の必要性がさらに強まっているのは周知の通りである。立教大学では、読解、聴解中心の受験英語の枠を超え、自発的な英語を発信する機会を授業の中でいかに多く与え、INPUTではなくOUTPUTのトレーニングをいかに有効的に行うかという課題に直面した。そこで、1クラス8人という、大学レベ

ルでは異例の少人数クラスで、学生がより多くの発話機会を得ることを実現した英語ディスカッションクラスが誕生したのである。もちろん、その機会を活かし、英語で自由に議論できるようになることが英語ディスカッションクラスのねらいである。

授業の内容と FD

英語ディスカッションクラスの大きな特色はまず統一シラバスにある。現在では4名のSVにより、学習目標および授業案の一例が提示されている。典型的な授業は、開始と同時に小テストを行い、議論をスムーズに行うためのフレーズFunctionを学習し、そのFunctionを定着させるための練習、流暢さのトレーニングと続き、そして、テーマに基づいたグループディスカッションを2回、それぞれ議題やグループメンバーを変えて行うことになっている。もちろん、ただその授業案に従うのではなく、各クラスのニーズに合わせて、講師が各々のレッスンを計画する。しかし、忘れてはならないのが、第一の目的は学生に自発的な発話の機会をより多く与えることである。学生たちは教育、人権、メディア、などのテーマが隔週で与えられ、それについて議論するわけだが、90分間の授業の中で、10分間の4人のグループディスカッションと16分間の4人のグループディスカッションを行うことになっている。各コマの目標の一つに、講師の干渉なしに最後の16分間のディスカッションを行うことができるとある。講師たちは、学生が自力で、その日に与えられた議題について16分間のディスカッションを行えるように、それまでの授業を計画する。

ここで統一シラバスにして高い教育レベルを維持するのに欠かせないのが、毎週行われるFDである。毎回のFDの内容は多岐にわたるが、たとえば、流暢さを向上させるための授業内活動のワークショップや、実際に行った活動の事例報告、意見交換、さらには、本ディスカッションクラスに関連する文献の紹介など、毎日の授業をより高いレベルでしかも安定して行うために、SVと講師たちは毎週FDを行なっている。FDの時間だけではなく、オフィス内でも常に意見交換し、必要に応じて補助教材を作成しては、本センターのウェブサイト上でその教材を共有している。より有効に自発的な発話を促すために作られる補助教材であるが、毎週約30種類アップロードされ、各クラスの特色やニーズに合わせて使い分けることも効率的に行える。

学生の反応と学習成果

そうはいっても、日本語ですら議論を交わした経験の少ない学生たちに、英語で議論することを教えるのは容易なことではない。英語が得意だという学生でさえ、英語で議論することには骨が折れるようである。過去2年間、4月の第1週の私の授業では、疑似体験として16分間のディスカッションを行った。立教大学に入学しての第一印象や抱負などの中から、トピックを選択して議論してもらった。比較的話し易い話題ながらも、いかに自分の言いたいことが話せないかを体験してもらう良い機会になった。共通して、1人の学生が30秒ほど自分の意見を話して、次の学生が30秒ほど自分の意見を話し、そして次の学生へというのが、彼らが体験する最初の英語ディスカッションである。通常議論開始から7～8分したところで沈黙が始まり、おそらくこのグループディスカッションが1学期を通して彼らが経験した最も長い16分

間だったと言えるだろう。

数週間すると、少人数であることも手伝い、学生同士が打ち解けて遠慮なく話せるようになってくる。この頃から、少しずつ人の意見を聞いて、質問したり、理解できなかったことは聞き返したりするという、自然な議論の形が見えてくる。16分間のディスカッションでは、多少の沈黙はあるものの、話すべき話題の中で、しかもグループ内で出てきた意見について掘り下げて話すということもできるようになってくる。そして、前期の終りには、16分間では言いたいことが全て言えないという不満が残るレベルにまで成長する。学期内に行うディスカッションテストのうちの一つは最終週に行うが、ここでは学生たちは口を揃えて、もっと時間が必要だと言う。4月には16分間のディスカッションを長過ぎると感じていた学生たちが、もっと話したい、時間が足りないと感じるのは、彼らの成長の証拠である。

教えずに学ばせる講師の手ごたえ

立教大学での英語ディスカッションクラスを担当するまでは、試験対策や英文法、英作文など、英語に関する授業はほぼ一通り教えてきたつもりだったが、ディスカッションクラスは、他の授業と大きく違う点がある。それは、講師が自らの発言を最小限に抑える必要がある点である。ディスカッションクラスでは、学生の自発的な発話を重んじているので、原則として、講師は自らの意見を発言しない、講師は文法や発音の間違いをその場で指摘、訂正し過ぎないというのが重要になってくる。教師の干渉が、学生が作り出したコミュニケーションの流れを断ち切らないことは非常に重要である。このディスカッションクラスでは、教師としての立場が、以前のクラスとは大きく違い、初年度の初めはかなり戸惑ったのを覚えている。

しかし、この2年間のディスカッション講師の経験を通して、一つ確信していることがある。それは、発話の機会を多く与えて、適切なアドバイスをすることにより、受験英語で培ったINPUT中心の英語を、OUTPUTできるようになるにはそれほど時間はかからないということである。ディスカッションクラスでは、学生たちが読んだことのない、あるいは聞いたことのない単語、表現はおそらく使われていない。その中で、改めて、OUTPUTをするにはOUTPUTの練習が必要だということを確信した。14週というのは語学学習としては決して長くない期間であるが、その間に起こる、学生のディスカッション力の変化には、驚かされる。

今後の課題と展望

英語ディスカッションクラスは、発足から2年間、絶え間なく進化し続けている。もちろんこれからも進化し続けていくであろう。言葉を発しないと評価にならず、クラス内のスピーキング力の差が大きく影響するため、レベル分けの方法という課題、少人数を実現するにあたり、教室が不足し1教室内で2クラスが行われる場合もある中、クラス同士がお互いを妨げないようにする方法など、いくつか改善の余地がある。SVおよび講師の教室内での日々の経験、学生たちの反応、その反応を見逃さない少人数クラス、そして、それらをオフィスに持ち帰って、すぐに議論できる環境と、ディスカッションクラスの更なる進化に必要なものは全て揃っている。そのおかげで、この2年間で、様々な改善を実現し、英語ディスカッションクラスは高く評価されて

いる。海外に進出しても、互角に議論できる力の必要性は、英語教育に従事するものだけでなく、社会の多くが認識していることであり、他大学、さらには、高等学校でも英語ディスカッションという科目が今後注目を浴びていくだろう。そのような中、立教大学の大規模な英語ディスカッションクラスというのは、まさにパイオニア的存在であり、これをプロトタイプとして、様々な教育現場で取り入れられていくことは間違いない。

よこもと　かつや
（本学英語ディスカッション講師）